

後悔のない道を自分で選ぶという話

改めて、緩和ケアとはどんなものかを考えます。時々こんな機会を持ちたいと思います。話の切り口はいくつかありますが、今回は私たちがどの辺を見て仕事をしているかのお話です。それは「意思決定の支援」です。がんと診断された時には体の痛みなどない人の方が多いです。むしろ気持ちの動揺、生活不安、家族関係の変化といった生活上の衝撃が主でしょう。そんな時、たまたま決まった主治医との関係だけで十分でしょうか？

短時間の外来で医師に向かってなんでも聞けますか？治療が生活に及ぼす影響が想像できますか？そんな時に誰か相談できる人はいますか？患者さんには家族にもニュアンスが伝わらない、当事者にしかわからない孤独があります。治療を受ける病院を選べるのだろうか？がんの標準治療とは何か？免疫療法や代替療法はどうか？マスコミやネットで見た治療はどうか？藁をもつかみたい気持ちで焦っても、よい選択ができるのか不安だと思います。そんな時、いったい誰が話を聴いてくれるのでしょうか？

当院では、がん診療連携拠点病院の窓口として「がん相談支援センター」を設置しています。そこでは相談相手として、がんに関する詳しい看護師や医療介護に詳しいソーシャルワーカーがいます。もし体に強い痛みがあれば、落ち着いて考えることもできませんから、私たち緩和ケアチームも関わります。

また、がんを経験したサバイバーの方々が「ピアサポーター」として患者さんの立場で相談に乗ってくれます。そうした関係から、医師の方針に合わせて無理したり、焦って仕事を辞めてしまったりせず、患者さんが自らの意思で治療を選択していけるようにできたらよいと思います。さらに、長い経過の中で転移や再発が見つかったからの治療や人生の過ごし方に迷うかもしれません。患者さんは、様々な場面でいくつかの岐路に立ち、判断を迷う場面に直面するものです。主治医に見放されたくないと思うあまりに、自分の事情を犠牲にするのは本末転倒ですね。患者さんやご家族が自ら選び、後悔のない選択をするためのお手伝いを「意思決定の支援」といいます。それこそが緩和ケアの最も重要な要素だと、私たちは考えています。

一人で抱え込まず、ぜひお近くの看護師や受付の職員にお声掛けください。ここで述べたような困難は、がん患者さんや家族に特有のものではありません。命にかかわる病があるといわれたときから、困難を希望に変えて、納得のいく人生を歩んでほしいと思います。入口はいつも開いています。患者総合支援センター・がん相談支援センターを利用してください。まだまだ利用される患者さんが少ないのが実情です。